

# 聞き取り調査より探る現代の四国遍路

竹川 郁雄

## はじめに

現代の四国遍路がどのように行われているのか、その現状を探るために松山市の畑寺町にある50番札所繁多寺において、四国遍路をする人を対象に聞き取り調査を実施した<sup>1)</sup>。自動車や徒歩などで札所をめぐる人々に対して、その場で質問用紙に自分で記入してもらったり、こちらで読み上げて回答していただくという形で行った。この調査結果について報告する。

現代の四国遍路を研究したものとして、早稲田大学道空間研究所の調査がある<sup>2)</sup>。これは長年の研究から、綿密に計画され実行されたものであるが、そこでの主な調査方法は、札所のある宿坊16カ所に調査票を留め置いて、ポスター等で調査依頼を促し、協力を求める方法、すなわち留め置き応募法による自記式調査法がとられ、調査の期間は1996年4月5日～5月末までとなっている。(以下、この調査を道空間研究所1996年調査と記述)この方法固有のバイアスとして、いわゆる「観光遍路」などの非修行遍路層は抽出されにくくなるのが指摘されており、我々が今回試みた調査は、それを補うものとして位置づけることができるであろう。我々の調査では必ずしも宿坊に宿泊しない、さまざまな遍路行の人たちを対象にすることができる。

しかしながら、我々の調査は、道空間研究所の調査の有効回収票1237票に対して461票と少なく、また遍路する人々が霊場から出てきた時において、立ったまま回答するという条件から詳細な質問はできず、それらの点で不十分であることを認めざるを得ない。そのようなことを考慮しながら道空間研究所の研究成果を参照しつつ、我々が収集した調査データからどのようなことが導き出せるか考えたい。

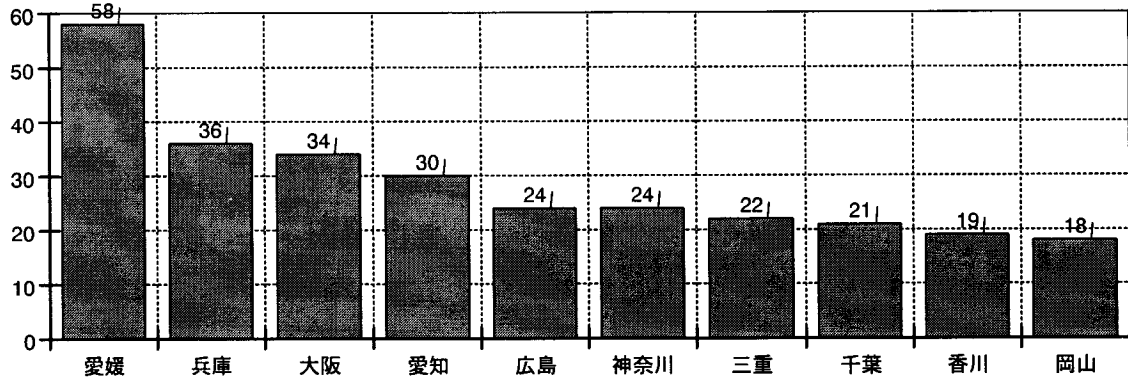
## (1) 聞き取り調査の実施について

調査の実施期間は、2006年3月17日、23日、27日、28日、4月7日、14日の6日間であった。雨天のため中止したり、教員や学生アルバイトの事情によりこのような日程となった。調査の実施場所は、繁多寺前の駐車場の広場で実施した。繁多寺に来る人はすべて駐車場の広場を通るので、調査には都合がよかった。そうではあるが、急いでいて受け入れられなかったり、心情的に拒否する者は当然おり、また団体で一斉に来る人にすべてお願いすることはできず、実施期間中における全調査対象者に対する回答率は不明である。

調査に協力してくれた人についての属性は、次の通りであった。性別では、男性53.5%、女性46.5%で、道空間研究所1996年調査においては、男性49.1%、女性50.9%となっており、今回の調査では男性の方がやや多くなっている。

年代は70代以上が31.0%、60代が最も多く46.4%、50代で11.1%、40代で2.4%と減っているが、30代で3.3%、20代で4.6%と若干増えている。10代では0.7%と少ない。道空間研究所1996年調査と比較すると、60代が最も高い36.3%であるが、そこから年齢が若くなるにつれ少なくなる傾向が一貫してでており、今回の調査のように20代で若干増えるという傾向は出ていない。今回の調査の方が、高齢者と若者の2極分解が顕著に出ているという傾向がうかがえる。

図表1 遍路する人の出身都道府県



「通しか区切りか」では、霊場88カ所を全部まわる通し遍路が32.8%、霊場88カ所のうちいくつか回る区切り遍路が67.2%で、道空間研究所1996年調査では、通し遍路が27.7%、区切り遍路が71.3%となっている。今回の調査で通し遍路が増えているのうかがえる。

## (2) 現代の四国遍路の傾向

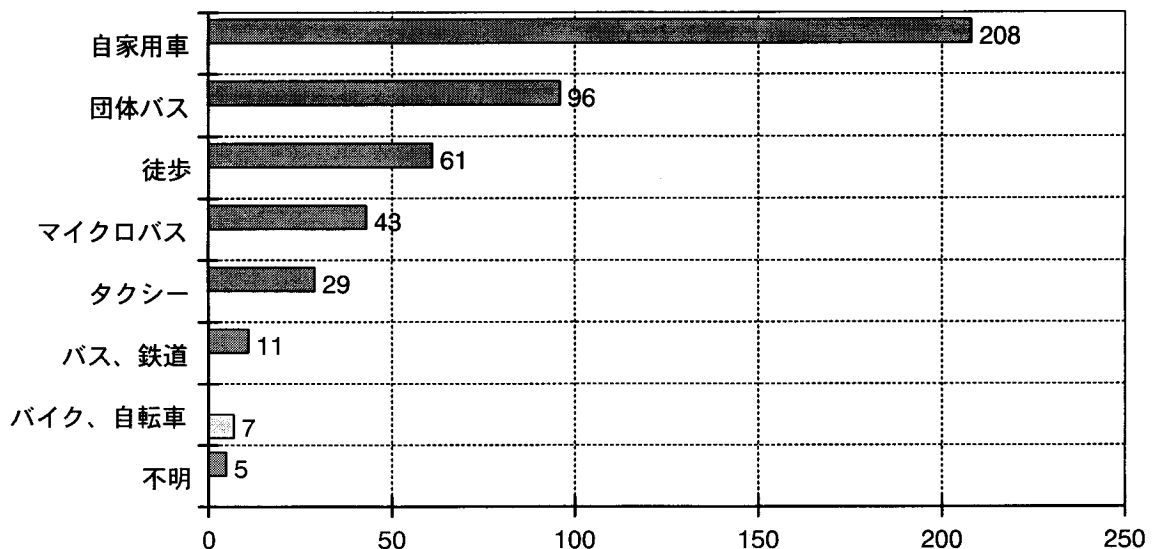
現代の四国遍路がどのように行われているか探るために、1. 「どこから来ましたか（出発地）」、2. 「遍路の交通手段」、3. 「遍路に利用しているもの（道具など）」、4. 「遍路のきっかけ」、5. 「遍路の目的」の5点について、集計結果より考えてみる。

### 1. どこから来ましたか（出発地）

「どこから来ましたか」の質問には、47都道府県のうち39都道府県にわたっており、四国のお遍路めぐりは全国的人気であることがうかがえた。

最も多いのはやはり調査地点のある愛媛県（58名）であるが、次いで多かったのは兵庫県（36名）で、そのうちの一人は「阪神淡路大震災により身近な人の死が多かったためでしょう」と話されていた。次は大阪（34名）、愛知（30名）、神奈川（24名）、広島（24名）と大都市のある府県が多かった。本調査を道空間研究所1996年調査と比較すると、本調査において特に愛媛県は多くなっているが、他の四国の県は多いとは

図表2 利用する交通手段



いえない人数となっている。四国全域で宿坊に泊まる者を対象とした道空間研究所の調査と、松山で実施した本調査の違いが出ていると考えられる。また、福岡と東京も本調査の方がかなり少なくなっており、調査期間中に団体の人たちが少なかったことなどによる偏りが出ていることが予想される。

## 2. 遍路の交通手段

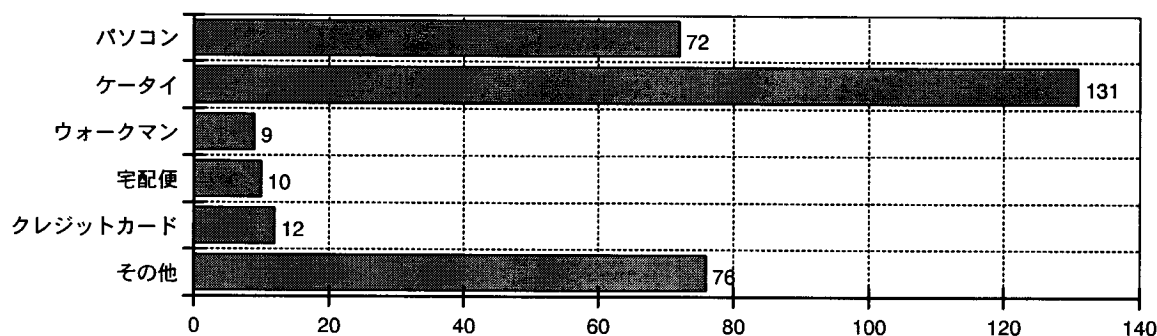
図表2は、利用している交通手段を示したものである。多いもの順に自家用車47%（208人）、団体バス20.8%（96人）、徒歩13.2%（61人）、マイクロバス9.3%（43人）、タクシー6.3%（29人）、バス・鉄道2.4%（11人）、バイク・自転車1.5%（7人）、不明1.3%（6人）であった。約半数が自家用車を利用しており、モーターゼーションが進んでより自由にお手軽に遍路行を実行していることがうかがえる。

その中で、徒歩の人が13.2%（61人）いることは注目すべきであろう。道空間研究所1996年調査では、徒歩のみの比率が10.8%となっている。調査対象者の面から考えると、本調査の方が自動車利用が多いように思えるのだが、それだけ徒歩の人が増えているのであろう。徒歩のうち、男性は81.0%、女性は19.0%で、道空間研究所1996年調査では、男性は82.1%、女性は17.9%で、比率的に男性8割強、女性2割弱という割合になっている。

## 3. 遍路に利用しているもの（道具など）

遍路をよくするために利用しているものについて尋ねた。グラフはその回答数を示したものである。最もよく利用されているものは、携帯電話で、131名が回答している。これを交通手段別に見てみると、自家用車53名、徒歩33名、団体バス19名、マイクロバス8名、タクシー8名、その他10名であった。比率で見ると、徒歩54.1%、タクシー27.6%、自家用車25.5%、団体バス19.8%、マイクロバス18.6%となり、徒歩による比率が非常に高くなっている。徒歩は単独行動が多くなるであろうから、連絡や安全のために多くの人利用するのであろう。それに対して、団体バスやマイクロバスでは、あまり必要度が高くないのであろうか利用する比率が低くなっている。

図表3 遍路で利用しているもの



パソコンについては72名の人を選択しているが、それらがすべて遍路をよくするために利用しているかどうかについては不明で、やや疑問が残るところである。遍路以外の日常生活で利用している人も選択している可能性があり、そのことについては前述の携帯電話も同様であるが、携帯電話の場合常時使用され区別はつきにくいであろう。パソコンの利用も、遍路道中に携帯して使用する場合はここでの利用にあたるが、家庭で遍路に関する情報を得るために利用する場合は微妙なところで、その利用頻度によっても判断は異なり、利用度を知るための設問としては不十分であった。そうした点をふまえる必要がある。交通手段別に見てみると、徒歩27.9%（17名）、自家用車19.7%（41名）、タクシー17.2%（5名）、団体バス7.3%（7名）、マイクロバス0%（0名）となっている。自分で情報を得る必要性のある人たちにおいて高い比率となって

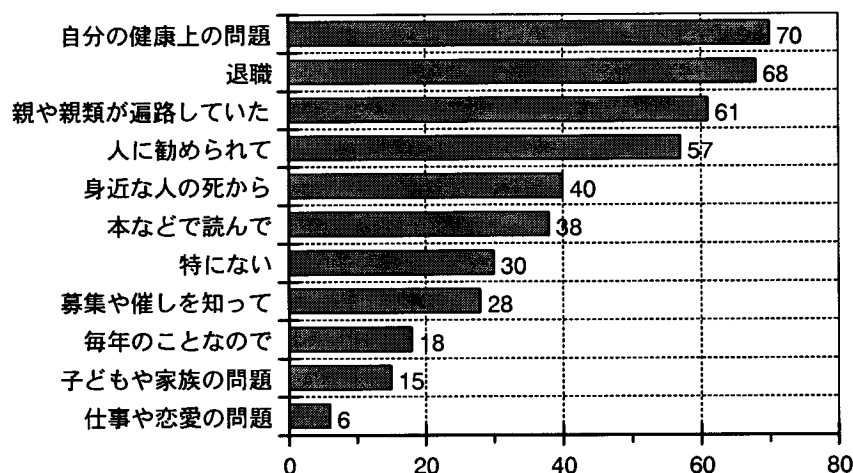
いて、パソコンは一定の利用がされていることがわかる。ノートパソコンが軽量化され情報の受発信や充電機器の便利さが増すにつれて、さらに利用度は増えていくであろう。

ウォークマンの利用者は9名、宅配便の利用者は10名、クレジットカードの利用者は12名とこれらの利用者は少なかった。その他の利用が76名と多い。この内訳は、「るるぶ」などのガイドブックやカーナビの利用であった。

#### 4. 遍路のきっかけ

遍路のきっかけについては、ひとつに限定することはむずかしいと考え、いくつでも回答してくださいと多重回答形式で行った。

図表4 遍路のきっかけ



選択した項目の多い順に、「自分の健康上の問題」12.5% (70名)、「退職」14.8% (68名)、「親や親類の人が遍路していたので」13.2% (61名)、「人に勧められて」12.4% (57名)、「身近な人の死から」8.7% (40名)、「本などで読んで」8.2% (38名)、「特にない」6.5% (30名)、「募集や催しを知って」6.1% (28名)、「毎年のことなので」3.9% (18名)、「子どもや家族の問題」3.3% (15名)、「仕事や恋愛の問題」1.3% (6名)であった。これ以外に、「その他」18.9% (87名)が多かったが、具体的に記入された内容を見ると、選択肢の項目と似ている、あるいは掲げた選択肢に含まれるものも多く見られ、「その他」に回答した人たちは調査票の選択肢を選ぶことに満足せず、あるいは気づかず自分が独自に思う内容を記入したのであろう。「その他」に該当する記入内容を掲げてみると、「お世話になった人がいるから」「孫が体が弱くて」「忍耐がほしくて」「彼氏が坊さんになったから」「僧侶になったので報告に」「四国がどんなものかを知る」「卒業で」「考える時間を得るため」「子どもと一緒に」「自然に」「人生も終わりの方だから」「戦争の供養」など。こうした例を見ても、それぞれ多様なきっかけで遍路に出ていることがうかがえる。

全般的な傾向を見てみると、選択肢の中で多いのは、「自分の健康上の問題」という身体的な理由が最も多く、次いで本人や夫の「退職」によるものとなっており、身体や生活の変化によるものが、きっかけとして一番多いようである。次に多いきっかけは、「親や親類の人が遍路していたので」、「人に勧められて」、「本などで読んで」など、遍路に関する情報を得たことが、きっかけとなっている。「身近な人の死から」は40名の人が選択しており、出身都道府県のところで述べたように阪神淡路大震災など不慮の死や親しい人との別れをきっかけに、いわゆる「わけあり遍路」に出るのであろう。

## 5. 遍路の目的

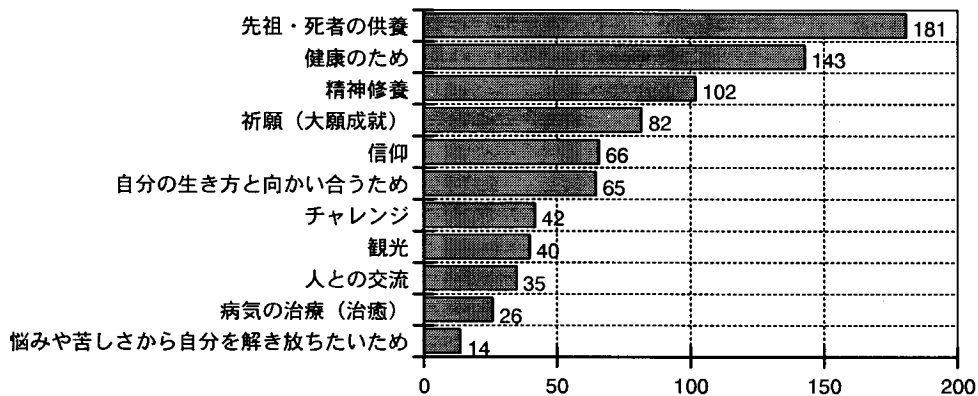
遍路の目的の質問は、遍路のきっかけと同様に、いくつでも回答してくださいと多重回答形式で行った。

図表5で示されているように、多い順に「先祖・死者の供養」(39.3%)、「健康のため」(31.0%)、「精神修養」(22.1%)、「祈願(大願成就)」(18.0%)、「信仰」(14.3%)、「自分の生き方と向かい合うため」(14.1%)、「チャレンジ」(9.1%)、「観光」(8.7%)、「人との交流」(7.6%)、「病気の治療(治癒)」(5.6%)、「悩みや苦しきから自分を解き放ちたいため」(3.0%)であった。なお、「その他」は53人(11.5%)であった<sup>3)</sup>。これらより、現代の四国遍路は、さまざまな理由により行われていることがうかがえる。この遍路の目的について、もう少し見てみよう。

図表6は、遍路の目的について回答のパターンを調べようとしたもので、ほかにどのような選択をしているか示したものである。たとえば、「先祖・死者の供養」を選択している181人の人たちは、「健康のため」を50人の人が選択し、「精神修養」を37人の人が選択しているなどを示し、また「先祖・死者の供養」だけを選択してほかに選択していない人(「単一選択者数」)は60人であり、「先祖・死者の供養」以外に他の選択肢を選んでいる平均(「他選択の平均回答数」)は1.38であることを示している。

この図表から確定的なことを読み取ることはできそうもないが、大きな傾向としてとらえられることをあげてみる。

図表5 遍路をする目的



まず、最も多くの人を選んでいるのは、上の例でも述べたように、181人により選ばれている「先祖・死者の供養」であり、この中の60人の人たちが(461人中の13%)が他の目的をあげていないことであり、また「他選択の平均回答数」1.38が示しているように他の目的をあげるにしても最も少ないことである。このように、「先祖・死者の供養」は遍路の目的として一番明確で多数によるものであることがわかる。同様に、「健康のため」(選択者143人、単一選択は48人)、「精神修養」(選択者102人、単一選択は29人)、「祈願(大願成就)」(選択者83人、単一選択は22人)まで、選択した人数は順に減っているが、他の目的と重複しつつそれぞれ固有の目的となっている。5番目に多い、「信仰」はやや異なり、「単一選択者数」がやや増え、「他選択の平均回答数」は1.71とやや減っており、他の目的を選ばない傾向が見え、信仰のためにのみ遍路に行っているということがうかがえる。

「自分の生き方と向かい合うため」「チャレンジ」「観光」「人との交流」は、「単一選択者数」が一桁と少なく「他選択の平均回答数」は2以上を示して他のものと重複して選ばれる傾向があり、少数派の目的であると考えられる。「病気の治療(治癒)」も「単一選択者数」は3名で少ないが、「他選択の平均回答数」は1.94と少なくなって単一的に選択されている。「悩みや苦しきから自分を解き放ちたいため」は選択者が14名と少なくまた「単一選択者数」も1名と少なく、「他選択の平均回答数」は4.57と非常に高いので、ごく少数の人の目的で、大半は他の目的と重複して選ばれていると考えられる。

図表6 ほかのどの遍路目的を選んでいるか（多重回答の傾向）

目的 選択 数	供養 181	健康 143	精神修養 102	祈願 83	信仰 66	生き方 65	挑戦 42	観光 40	交流 35	治療 26	解放 14
1	健康 50	供養 50	供養 37	供養 34	供養 25	供養 27	供養 17	供養 16	健康 20	供養 14	祈願 9
2	精神修養 37	精神修養 27	健康 27	精神修養 22	精神修養 17	健康 27	健康 14	健康 15	精神修養 18	健康 14	供養 8
3	祈願 34	生き方 27	生き方 25	健康 21	祈願 14	精神修養 25	交流 14	祈願 13	供養 15	精神修養 10	精神修養 7
4	生き方 27	祈願 21	祈願 22	信仰 14	健康 13	挑戦 12	生き方 12	信仰 9	挑戦 14	生き方 8	健康 7
5	信仰 25	観光 15	信仰 17	観光 13	観光 9	祈願 11	祈願 12	挑戦 7	生き方 11	祈願 8	生き方 7
6	挑戦 17	治療 14	挑戦 14	挑戦 12	生き方 9	交流 11	観光 7	精神修養 6	祈願 11	信仰 6	治療 6 交流 6
単一 選択	60	48	29	22	26	9	7	6	2	3	1
他平均 回答数	1.38	1.48	1.83	2.52	1.94	1.71	2.22	2.20	3.29	1.94	4.57

## 6. 交通手段別に見た遍路の目的

交通手段別に遍路の目的を示したのが、図表7である。これによると、交通手段により遍路の目的も違ってくることがわかる。

自家用車利用では、「先祖・死者の供養」と「健康のため」が他の目的と比べて多く、「悩みから自分を解放したい」が少なく、他の交通手段と比べて相対的に「人との交流」が少ない。他の交通手段よりも自由に動き回ることができ、道中での人との交流は期待されていないのであろう。

団体バス利用では、「先祖・死者の供養」と「祈願（大願成就）」が多く、「観光」と「悩みから自分を解放したい」が少ない。「観光」が「マイクロバス」に次いで他の交通手段より低くなっており、バスに乗っていてもそうした意識は少ないのであろう。

マイクロバス利用では、「先祖・死者の供養」と「健康のため」が多く、「信仰」と「精神修養」が他の交通手段と比べて相対的に多い。「信仰」が交通手段のなかで最も高く、信仰心の篤い人たちがよりマイクロバスを利用するのであろう。

タクシー利用では、「先祖・死者の供養」が多く、「信仰」と「観光」が他の交通手段と比べて相対的に多く、「チャレンジ」で少なくなっている。「先祖・死者の供養」や「信仰」が多いけれども、「観光」も比率的に高くなっていて、さまざまな人が利用していることがうかがえる。

徒歩では、「健康のため」が多く、「自分の生き方と向かい合うため」と「チャレンジ」は他の交通手段と比べて相対的に多く、「先祖・死者の供養」は交通手段別で最も少ない比率となっており、「治療（治癒）」、「信仰」、「祈願（大願成就）」も少なくなっている。明らかに自動車利用とは異なり、長い遍路道を自分の足で歩くことに関わる項目が多く選択されている。「精神修養」は多い方だが「信仰」は少なくなっており、宗教的修行の意識をもっている人は少ないとみられる。

電車バス利用とバイクその他は、回答者がそれぞれ11名、12名と少なく、傾向を読みにくい状態であるので参考程度とするが、電車バス利用は徒歩の傾向に近く、バイクその他は車利用と徒歩の中間のようである。

図表7 交通手段別遍路の目的（上：交通手段ごとの回答比率 下：回答数（多重回答））

	自家用車	団体バス	マイクロバ	タクシー	徒歩	電車バス	バイク他
先祖・死者の供養	38.0 (79)	47.9 (46)	46.5 (20)	51.7 (15)	19.7 (12)	36.4 (4)	41.7 (5)
健康のため	31.3 (65)	26.0 (25)	32.6 (14)	17.2 (5)	41.6 (25)	45.5 (5)	33.3 (4)
精神修養	19.2 (40)	25.0 (24)	27.9 (12)	17.2 (5)	24.6 (15)	36.4 (4)	16.7 (2)
祈願（大願成就）	18.8 (39)	27.0 (26)	9.3 (4)	17.2 (5)	6.6 (4)	0.0 (0)	41.7 (5)
信仰	13.5 (28)	16.7 (16)	27.9 (12)	24.1 (7)	3.2 (2)	0.0 (0)	8.3 (1)
自分の生き方と向かい合うため	11.5 (24)	11.5 (11)	7.0 (3)	13.8 (4)	27.9 (17)	36.4 (4)	16.7 (2)
チャレンジ	4.8 (10)	7.3 (7)	2.3 (1)	3.4 (1)	27.9 (17)	27.3 (3)	25.0 (3)
観光	11.1 (23)	3.1 (3)	2.3 (1)	17.2 (5)	4.9 (3)	18.2 (2)	25.0 (3)
人との交流	4.8 (10)	6.3 (6)	7.0 (3)	6.9 (2)	16.4 (10)	18.2 (2)	16.7 (2)
病気の治療（治癒）	4.3 (9)	10.4 (10)	4.7 (2)	6.9 (2)	1.6 (1)	9.1 (1)	8.3 (1)
悩みから自分を解放したい	2.4 (5)	3.1 (3)	2.3 (1)	6.9 (2)	3.2 (2)	0.0 (0)	8.3 (1)
小計（交通手段回答数）	45.2 (208)	20.9 (96)	9.3 (43)	6.3 (29)	13.3 (61)	2.4 (11)	2.6 (12)

## おわりに

以上、現代の四国遍路の現状について調査結果よりその一端を示した。四国遍路をする人は、本調査で見たように60代以降の世代が4分の3以上を占め、今後団塊の世代が続々定年退職をむかえ、ますます高齢者世代が増えていくことが予想される。そうした人たちの傾向が本調査でも現れていた。現代の四国遍路については、有名な政治家の遍路など人目を引くパフォーマンス的な現象がよく注目されるけれども、四国遍路の実態を知るためには地道な調査研究を蓄積していくことが重要であろう。

- 1) 快く実施させていただいた繁多寺住職他の皆様には篤く感謝するしだいである。
- 2) 長田攻一、坂田正顕、関三雄編『現代の四国遍路 道の社会学の視点から』学文社、2003年。
- 3) 道空間研究所1966年調査では、「今回の遍路の主な動機は何でしょうか」という問いに対して、14の選択肢を用意し、あてはまるものを3つまで答えてもらう形で実施している。同書329-337頁。質問の形式が若干異なっているので、そのまま比較しにくい。「家内安全」の項目以外は、だいたい同じ傾向を示している。しかし、「家内安全」に関しては、道空間研究所1966年調査では2番目に多い46.2%の回答となっている。それに対して、本調査では選択肢としてあげておらず、その他の選択で「家内安全」と記入している者が6名だけで、その目的を持つ者は記入されていない「その他」に入っているか他の選択肢に分散しているものと考えられる。